

## 書評：新本史斉著『微笑む言葉、舞い落ちる散文 —ローベルト・ヴァルザー論』鳥影社，2020年

Rezension zu: Fuminari Niimoto: *Lächelnde Worte, nach unten tänzelnde Prosastücke*. Nagano: Choeisha, 2020.

木村 千恵

東京外国語大学大学院博士後期課程

Chie KIMURA

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

「ヴァルザーの書いたものはたくさん読むことができるが、彼については何も読むことができない」<sup>1</sup> と同時代人のヴァルター・ベンヤミンが評しているように、スイスの作家ローベルト・ヴァルザー（1878-1956）は、その人物像も作品もどこか謎めいている。ヴァルザーが遺した作品は膨大な数に昇るが、彼の作品ではいつも、これといった事件や出来事が起こらないまま、登場人物や語り手による絶え間ないおしゃべりが繰り返される。その文体は、つかみどころのなさと同時に、牧歌的な軽やかさを感じさせる。その無内容さと幸福感の両方をあわせもつ奇妙な印象は、フランツ・カフカにも好まれていた<sup>2</sup>。生前は大きな名声を手にもすることなく、彼の死後も長らく忘れられた作家であったが、1970年代以降は再評価が進んでおり、今日では多くの作家や芸術家に高く評価されるとともに、ドイツ語圏のみならず国際的に学術研究が進められている。日本では、本書の著者である新本史斉氏が中心となって刊行した『ローベルト・ヴァルザー作品選集』（鳥影社）によって、本格的に紹介されてきた。ここでとりあげる『微笑む言葉、舞い落ちる散文—ローベルト・ヴァルザー論』は、そのようなヴァルザーについての日本で初めてとなるモノグラフィーである。

本書のタイトルとなっている「微笑む言葉」、「舞い落ちる散文」は、それぞれヴァルザー自身の作中の文章をもとにしたフレーズであり、どちらも彼の「幸福な言葉」が生まれることになった経緯を象徴的に表現している。本書は、すでに

<sup>1</sup> Benjamin, Walter: Robert Walser [1929]. In: Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften*. Bd. II,1. Hg. v. Rolf Tiedemann u. Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt a. M. 1991, S. 324. 「ローベルト・ヴァルザー」 浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション2』（ちくま学芸文庫，1996年，98頁）

<sup>2</sup> Brod, Max: Kafka liest Walser. In: Katharina Kerr (Hg.): *Über Robert Walser*. Bd. 1. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1978/1979, S.85–86.

刊行された『作品選集』の構成を辿ってゆくテーマ的な解釈（第1部）、ならびに、著者自身の翻訳実践を手がかりとしたレトリック分析（第2部）という2つのアプローチによって、ヴァルザーの奇妙な言語活動の成立過程とそのアクチュアリティを明らかにしていく。本書の冒頭では、ヴァルザーの言語に対する懐疑的な意識が、すでに初期の散文に表れていることが指摘されている。19世紀末から20世紀初頭にかけて、言語が現実を表現できるかという問いは哲学者や作家たちにとって根本的なテーマの一つとなっており、ヴァルザーの創作活動もこうした問題との闘いの軌跡であった。

第1部では、詩や散文、小戯曲を書いた初期スイス時代（1899-1905）、3作の長編小説を続けて出版したベルリン時代（1905-1913）、故郷の小都市で散文小品の執筆に専念したビール時代（1913-1921）、ミクログラムと呼ばれる独自の微細な文字を使用して数多くの作品を生み出したベルン時代（1921-1933）という、ヴァルザーのそれぞれの創作時期における代表作が論じられる。第1章では、ヴァルザーの作品全体に通底する、言語や虚構に対する反省的な態度が顕著に現れている例として、初期の小戯曲『白雪姫』が取り上げられる。そのなかで、現実を「真実と嘘」、「善と悪」というように、二元論的に切り分けようとする近代社会の制度に対する、ヴァルザーの批判的な意識が浮き彫りになる。第2章ではまず、小戯曲『少年たち』ならびに『詩人たち』を通して、初期のヴァルザーが直面していた言語危機の問題と、ナイーブで陰鬱な詩人や芸術家のクリシェに対する彼の抵抗が説明される。その後、『白雪姫』やベルリン時代の長編小説『タンナー兄弟姉妹』において、軽やかで幸せな言葉が誕生する過程が説明される。第3章では、ベルリン滞在を通して確立されていくヴァルザーの作家としてのアイデンティティがテーマとなる。大都市と若き作家の差異にはじまり、成功した画家の兄カールと弟ローベルトとの差異、ドイツの伝統的な教養小説に対する、成長を拒む主人公を描いた日記体小説『ヤーコプ・フォン・グンテン』との差異等を示しながら、彼が「小さなもの」や「日常的なもの」を好んで取りあげるようになる経緯が解き明かされる。しかし、ヴァルザーの文学形式や彼のお気に入りのモチーフは、同時代の読者からの理解を得られるものではなかった。第4章では、彼がいかにしてベルリンでのスランプを克服し、故郷の小都市ビールで再び書くことに喜びを見出したかが説明されている。ここでは、中編小説『散歩』を手がかりに、事の大小を問わず無秩序に訪れる事物に身を任せるとともに、書くという行為そのものを意識するという、ヴァルザーの創作論が提示される。こうした思考法は、第5章で論じられる長編小説『盗賊』へと発展してゆく。この時期のヴァルザーは、鉛筆で小さな文字を書き連ねることを通して、綿密な作業の

要求する忍耐とともに、子どものような幸福感を再び経験することになる。こうした書記行為こそが、長編小説という形式のパロディ化や表象行為が内包する暴力性への自覚といった、内省的な洞察をこの小説にもたらしめているのである。以上のように第1部は、各章で展開される個々の作品の詳細な分析を通して、ヴァルザーの思想の多面性を探っていくとともに、全体としては、「成長を拒む」主人公を書き続けたヴァルザーの作家人生の変遷を描き出すものになっている。

第2部では、本書でもっとも重要な位置を占める小戯曲『白雪姫』の全訳が収められるとともに、英語、フランス語、日本語の翻訳との比較を通して、「Bild（画像，光景，心的イメージ）」「Sinn（意味と感覚）」「Märchen（メルヒェンと作り話）」といった多義的な言葉の意味が検討される。英語やフランス語とは異なり、日本語にはドイツ語と意味範囲が相当する単語が存在しないからこそ、翻訳困難な言葉や、一元的なイメージから巧みにすり抜けるレトリックを検証することが可能となっている。そして、このように著者自身がヴァルザーのテキストを日本語に写し取ろうとする姿勢は、モデルを見つめ、描き出そうとするヴァルザーの言語活動を実践的に再現したものとなっている。

一般にヴァルザーというと、精神病院で余生を過ごしたという伝記的事実から、繊細で不幸な作家というイメージがつきまとう。しかし、こうしたイメージは、カフカによる「彼から生まれ出るものといえ、読者の幸福にほかならない」<sup>3</sup>や、ベンヤミンによる「彼ら〔ヴァルザーの主人公たち〕はみな癒された人々なのである」<sup>4</sup>といった評価とは大きく異なっている。すでに近年の研究では、ヴァルザーの複雑な文体や微細な文字と精神疾患の兆候として読み取ったり、浮世離れした孤独な詩人として神秘化したりするような解釈は疑問視されている。しかし他方で、ヴァルザーの作品が提供する幸福な読後感を論証するのは困難であった。本書は、実はこうしたクリシェこそ、ヴァルザーが生涯を通して抵抗してきた近代的な価値制度のひとつであると見抜き、彼が膨大な数の作品を書き続けた理由を解き明かしている。さらに、ヴァルザーの戦略的な言葉の読解を通して、読者自身の価値観さえも揺るがされるのである。こうしたテーマを論じることができたのは、著者が長年翻訳と文学研究の両方の立場から、ヴァルザーの表層的でありつつ深遠な言葉に向き合ってきたことによるものである。本書は、そのような近代の制度から解放されたヴァルザーの「微笑む言葉」や、雪ひらのように「舞い落ち」、残り続けている散文を読み解くための視座を与えてくれる。

<sup>3</sup> 本書96頁。Kafka, Franz: Brief an Direktor Eisner. In: Kerr 1, S. 76.

<sup>4</sup> 同上。Benjamin, S. 326.

